

古代史シリーズ7

「秦氏と渡来人」講座計画表



第 1回(XX/XX/’XX) 渡来人とその時代背景

第 2回(XX/XX/’XX) 東漢氏と西文氏

第 3回(XX/XX/’XX) 秦氏の組織化

第 4回(XX/XX/’XX) 秦氏の生産活動

第 5回(XX/XX/’XX) 山背の秦氏

第 1回 渡来人とその時代背景

- ・渡来人のうねりと時代背景
- ・氏姓制度の変遷

中心出典:「渡来氏族の謎」加藤謙吉著(祥伝社新書)
「古事記」(竹田恒泰著、学研)、「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)他

I. 渡来人のうねりと時代背景

1. 移住時期のうねり

4-7世紀の300年間の間に3回の大きな渡来のうねりがある。いずれの時期も朝鮮半島の動乱の時期と重なる。

参照資料1-1, 1-2

(1)1回目:4世紀末から5世紀の初頭。

倭が百済を支援し、新羅支援で南下した高句麗好太王と激突した時期。応神紀に当たる。

・「高句麗」が南進策(3-4世紀)

朝鮮半島では、紀元前後の頃に勃興した「高句麗」が南進策をとり、4世紀初頭には中国の直轄地である楽浪・帶方二郡を滅ぼす。

・この刺激で、3世紀の南朝鮮で馬韓・辰韓・弁韓の3地域で小国群を形成していた韓族は、4世紀中ごろ、馬韓から伯濟国(はくさいこく:百済)、辰韓から斯蘆国(しろこく:新羅)が興り、周辺諸国を統一する。

・朝鮮半島南部の弁韓だけは小国分立の状況が続き、伽耶(加羅)と呼ばれるようになる。

・倭国は、4世紀後半から任那を支配し、朝鮮半島に積極的に介入するようになる。

参照資料1-3

百済と高句麗に対抗

(2)2回目:5世紀後半から6世紀初頭。

・457年、百済の王都漢城(現、ソウル)を襲った高句麗の長寿王が百済の蓋鹵王(がいろおう)を殺害し、領土の大半を奪い取る。百済は倭の力を借りて国の再興を図る。

・記紀では、雄略紀七年条に百済から「今来才伎(いまきのてひと)」が献上されたとある。

・「今来」は5世紀以降の新参渡来人、「才伎」は手人(てひと)と言い、技術者・工人を意味する。
ちなみに、5世紀以前の渡来人は「旧」で応神紀までの渡来人に割り当てる。

・倭の5王時代である。

(3)3回目:7世紀後半。百済は唐と新羅の連合軍の攻撃を受け滅亡。

- ・倭も救援するが白村江の戦い(663年)で惨敗。天智天皇紀に当たる。
- ・668年には、唐・新羅の連合軍により高句麗が滅ぼされる。
- ・新羅による併合:6世紀には伽耶、7世紀には百済と高句麗が滅亡する。

追記:918年に後高句麗にいた王建(太祖)が高麗国を建国し、936年に朝鮮半島の後三国(新羅、後百済、後高句麗)を統一し、李氏朝鮮が建てられる1392年まで続いた。

⇒この約300年間混乱の中で、朝鮮半島から多数の人々が日本列島に渡来した。

平安時代の住所録

3. 渡来人の帰属先と出自

弘仁六(815)年成立の『新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)』には、

- ・平安京と畿内五ヶ国居住の1182氏族の本系(系譜記録)を掲げる。
- ・その内、渡来系(諸蕃)は326氏ある。
- ・諸蕃326氏の内訳は、漢(中国)163、百済104、高麗(こま、高句麗)41、新羅9、任那9。
中国系が半数を占めるが、大半は出自を二次的に中国系に改めたものである。

参照資料1-4

(1)4・5世紀の渡来人(旧)の帰属

渡来系遺物から、伽耶系で占められ、移住先は畿内や西日本の各地の有力首長のもとに分散して帰属した。

⇒この時期の大和政権の実態は列島各地の連合政権。各地の豪族が半ば独立して、土地や人民を支配できた。

①吉備の渡来人

* 5世紀前半の窪木(くぼき)薬師遺跡^注: 古代吉備の代表的する鉄鍛冶遺跡。

(注)岡山県総社市窪木(埋蔵文化財学習の館の場所)

サイト有

・伽耶での伽耶南部(釜山)の福泉洞(ポンチョンドン)古墳群の出土品と類似。

・窪木の近くにある隋庵(ずいあん)古墳の出土品も類似する。造山(つくりやま)古墳の陪塚^注(ばいちよう)とみられる。(注)主人の墓に伴う従者の墓

⇒吉備の首長に大事にされていた渡来人領主の墓。独自の交易ルートがあった。

・近くに5世紀前半の巨大前方後円墳である造山古墳(つくりやま:350m)がある。

応神天皇に協力して勢力を拡大した吉備下道臣の祖・御友別命(ミトモワケノミコト:妹の兄媛は応神妃)がその被葬者と見る説もある。

②畿内大和の渡来人

* 5世紀前半の南郷遺跡群^注: 奈良県御所市(ごせし)にあり、鉄器や玉などの手工芸品生産が大規模に複合的になる。

『和名抄^注(わみしょう)』での大和国葛上郡高宮郷を中心とした掖上(わきがみ)一帯(御所市)は、5世紀の大豪族葛城氏の中心勢力の本拠地であった。

(注)平安時代中期に作られた漢和辞書である。

* 神功紀五年三月条:新羅からの皇后への申立てが新羅王のウソ^注であることが判り、葛城襲津彦(かつらぎそつひこ)が怒り戦い、新羅(草羅城:さわらのさし)から捕虜として連れ帰った俘人たちが、桑原・佐廩(さび)・高宮・忍海(おしぬみ)の4邑の漢人(あやし)らの始祖である。

近くに、名柄遺跡工房跡(御所市)、脇田遺跡鍛冶生産遺跡(葛城市)などがある。

(注)日本書紀神功五年春三月七日条を参照のこと。

* 応神紀十四年春2月条:加羅に抑留されていた弓月氏(百濟)支配下の人夫百二十県を召喚するために葛城襲津彦が派遣された。『姓氏録』の秦忌寸(はたいみき)の本系は、山背の秦氏の一部が葛城氏配下の掖上の地に置かれ、その後山背へ移住した。

(2)「獲加多支鹵(ワカタケル)大王」紀の渡来人組織化

稲荷山古墳出土の鉄剣銘や江田船山古墳出土の太刀銘に「獲加多支鹵大王」と刻まれた天皇で、「治天下(あめのしたしらめす)大王)」と大王を名乗った最初の王である。

5世紀後半と想定される。

①軍事力の強化

* 即位後、豪族の大伴氏や物部氏を伴造^注とし、大王の私兵を直属の軍事組織に編成する。

注:「伴」は友・供と同音でヤマト王権の長である大王に奉仕する意味があり、「造」は集団の長としての意味があった。

参照資料5-2

* 葛城と吉備の統合

・雄略紀: 安康天皇(20代)を殺した眉輪王(まゆわおう)を匿った葛城の円大臣(まどかおおみ)を共々焼き殺す。⇒葛城氏滅亡

・雄略紀七年条、備中の吉備下道臣前津屋(きびのしもつみちのおみさきつや)を誅殺、備前の吉備上道臣田狭(きびのかみつみちのおみたさ)を反乱の門(新羅と組んで反抗しようとしたことが判明)で退ける。

・天皇継承を企んだ星川皇子を焼き殺す。支援した吉備上道臣から砂鉄の産地「山辺」を没収。

⇒葛城氏と吉備氏の在地勢力が相次いで大和朝廷に屈服した事実を伝えている。

②王権の強化

* 「今来」の渡来人の移住: 多数の「今来」の渡来人は地方に分散居住せず、王権の意向により河内や大和に住まわされる。

⇒地方の首長族に帰属していた旧の渡来人も、次第に王権が及ぶようになる。

* 「ウチ(氏)」の組織が成立する。(5世紀末から6世紀初頭)

・ウチの名は事象ではなく、奉仕の在り方や職掌に応じて王権より付与された。

大伴氏(大王の伴)、物部氏(武器や武具を意味する「物(もの)」を扱う集団)で天皇の親衛隊、モノノフ。

⇒王権への隷属・奉仕を前提として形成された政治組織。

* 「カバネ(姓)」: ウチの性格にもとづき、身分標識である「カバネ(姓)」が与えられた。

Ⅱ．氏姓制度の変遷

大和王権において、大王(天皇)から有力な氏族に与えられた、王権との関係・地位を示す称号である。その成立時期は、5～6世紀をさかのぼらない。

①第13代成務天皇紀

最初にカバネを制度化。国・郡に造長(みやっこさ)、県邑(あがたむら)に稻置(いなぎ)を置き、盾矛を賜い印とした。

参照資料1-5—①、②

②第19代允恭天皇紀

臣連制が導入され、公・君(きみ)、臣(おみ)、連(むらじ)、直(あたい)、首(おびと)、史(ふひと)、村主(すぐり)などが定められた。この改革により以前の国造・県主はアタイ(直)姓に。

③第40代天武天皇紀

参照資料1-5—②

* 氏姓の制度は、壬申の乱(672年)の後、第40代天武天皇が制定した八色の姓(やくさのかばね)によって有名無実化してしまった。

・壬申の乱とは、第38代天智天皇の崩御後、大海人皇子(後の天武天皇)と大友皇子(後の弘文天皇)による後継者争い。

・壬申の乱の報奨で作られた八色の姓の制で与えられた姓は、上から、真人(まひと)・朝臣(あそみ)・宿禰(すくね)・忌寸(いみき)・道師(みちのし)・臣・連・稻置(いなぎ)と定められた。

* 貢献度に応じて実際に与えられたのは、上位4姓とされる。

・この制によれば、それまで上位の姓とされた臣・連は序列の6、7番目に位置付けられ、その地位は低下している。

・代わって、天皇への忠誠心がある有能な者には、新たに作られた真人・朝臣・宿禰などの上位の姓が与えられて、従来の氏族秩序にとらわれない人材登用が図られた。

・しかしながら、奈良時代を過ぎる頃には、ほとんどの有力氏族の姓が朝臣になってしまい、八色の姓も形式的なものとなってしまった。

参照資料1-6